

ローカル線で行く！ フーテン旅行記 4

—この秋は東北に出かけませんか？ 東北のローカル線—

岡山大学 工学部 機械工学コース 助教

大西 孝



専門は機械加工（研削）。主に円筒研削や内面研削を対象として、工作物の熱変形や弾性変形に伴う精度の悪化を防止する研究を進めている。趣味は列車を使用した旅行（47 都道府県を踏破済）。

はじめに

東 日本大震災から、4年以上がたちましたが、被災した地域ではまだまだ復興の途上という印象をうけます。一方で、今年の5月末には、仙台と石巻を結ぶ仙石線が全面復旧するなど、明るい話題もありました。今回は、この秋に訪れたい東北の2つのローカル線をご紹介します。

1. 紅葉に染まる山寺！ 仙山線

ま ず、秋にふさわしい観光地としてご紹介するのは山形県の立石寺（りっしやくじ）です。山寺こと立石寺は、かの松尾芭蕉が「閑さや 巖にしみ入る 蟬の声」という有名な句を詠んだことでも知られる古刹で、山肌に張り付くように歴史ある建物が点在しています。芭蕉の句のように夏に行ってもいいかもしれませんが、奥の院まで延々と約1000段の石段を上らなければなりませんので、少し涼くなった秋の訪問がお勧めです。また、秋は山全体が紅葉に包まれ、息を飲むような美しい光景が見られます。



仙山線の電車から眺めた山寺。紅葉の山腹に並ぶ建物が小さく見えます。写真中央の崖の上に小さく見える建物が五大堂。

立石寺へは、仙台と山形を結ぶ仙山線が便利です。仙台駅から1時間足らずで立石寺最寄りの山寺駅に到着します。仙山線の沿線も紅葉シーズンには赤や黄色の鮮やかな木々が多くみられ、退屈することはないでしょう。



紅葉をバックに鉄橋を渡る仙山線の電車。車窓は赤や黄色に彩られます。

山寺駅に到着すると、登山口までは徒歩で10分程度です。ただしその先は時間がかかり、奥の院までは往復で1時間程度を見込んでおくとい良いでしょう。修行者の参道と呼ばれるそれほど広くない石段をひたすら上り、巨大な一枚岩などを眺めながら仁王門をくぐると行程の約3分の2



色付いた木々に囲まれた仁王門。ここまで来ると、奥の院までもう一息です。

は終わりです。さらにもう一息、我慢して山を登ると。奥の院と大仏殿へたどり着きます。ここで後ろを振り返ると、相当に高いところまで上ってきたことに驚きます。

奥の院でお参りした後は、五大堂に行ってみましょう。五大堂は山肌に張り出すように作られた展望台のようなもので、眼下に山寺駅を中心とした街



五大堂から眺めた山寺の街並み。写真右端の山寺駅を出発した仙台方面へ向かう電車が、模型のように小さく見えます。

並みが一望でき、まるで街のミニチュア模型を上空から眺めているようです。また、街の向こうに広がる山々もきれいに色づいており、観光客が感嘆の声を上げていました。



千段余りの階段を上がって到着した奥の院。見事な紅葉に疲れを忘れず。

山寺にお参りしてお腹がすいたら、仙山線に乗って山形市内まで足を延ばしてみるのも一興です。山形市内には「冷やしラーメン」なる名物があります。この冷やしラーメンとは、普通のラーメンを冷やしたもの（冷やし中華に非ず！）で、店によってはスープに氷が浮いていたりします。もちろん冷たくても美味しくいただけるような工夫がしてあり、私がお邪魔した店では、牛ベースのダシに、これもまた牛肉のチャーシューが載っていました。冷たいので、ダシそのものの味もよく分かりますし、あっさりしているので濃厚なラーメンとはまた違った魅力があり、病み付きになる人もいるかもしれません。

（岡山大学職員組合 組合だより 180号より再掲）



山形名物「冷やしラーメン」。写真はワンタン入りの「冷やしワンタンメン」。氷が浮いており他では味わえない食感です。舎と対照的です。

2. 「じえじえじえ!」 幻の「うに弁当」 三陸鉄道 北リアス線

2013 年度上半期のNHK連続テレビ小説「あまちゃん」。題名に挙げた「じえじえじえ」という岩手県三陸地方北部の方言が印象に残っている方もいらっしゃるかと思います。この「あまちゃん」の舞台である岩手県久慈市（作中では「北三陸市」という設定だそうです）は、幻の駅弁「うに弁当」がある町として全国の駅弁ファンにも有名です。

久慈市にある久慈駅は、八戸からのJR八戸線と、三陸鉄道北リアス線の接続駅です。三陸鉄道は岩手県内の三陸海岸を南北に結ぶ路線で、久慈から宮古を結ぶ北リアス線と、釜石から盛を結ぶ南リアス線の2路線があり、「あまちゃん」の作中には「北三陸鉄道（通称：北鉄）」という設定で北リアス線が登場します。いずれも海



久慈駅の様子。小さな駅ですが駅弁ファンには、つとに有名です。「あまちゃん」では「北三陸駅」として登場。



久慈駅で発車待ちの三陸鉄道北リアス線の普通列車。これも「あまちゃん」でお馴染みの車両です。

岸線に近いところを走るため、東日本大震災によって発生した巨大津波で被害を受け、震災直後は全線が不通となりました。ただし、1984年開業と比較的新しく、高架橋とトンネルで高台の上を走る区間も多いため、岩手県や宮城県、福島県の沿岸で壊滅的な被害を

受け、全面復旧のメドが立たないJR線に比べると三陸鉄道の被害は部分的で、2014年春に全線が復旧しました。

久慈を出た列車は、宮古まで三陸海岸を南下しますが、前述のとおりトンネルが多く、意外と海が見える区間は少ないです。しかし、たまにトンネルを抜けると高台の上から眺めが開けるところもあり、三陸特有の入り組んだ海岸線や漁港を見下ろすことができます。漁協の周りには高い堤防が多く、また線路の山側の高台には「避難場所」と書かれた看板があり、津波に対する備えを感じます。

さて、冒頭に述べた「うに弁当」ですが、なぜ幻の駅弁かということ、1日の生産数がわずか20個限定であることと、現地まで行かないと入手できないという2つの理由があります。生産数が少ないのもさることながら、久慈駅は新幹線が停車する八戸駅からでも、約2時間列車に揺られる必要があり、アクセスが容易ではありません。筆者は八戸7時発の列車に眠い目をこすりながら乗車し、久慈駅の売店（というか立ち食いソバ屋）で「うに弁当」を入手しました。「中身で勝負!!」と言わんばかりのシンプルな包装を解いて食した時の感激は言うまでもありません。ウニの炊き込みご飯が上にもウニぎっしり敷き詰められており、ウニの香りを満喫できました。これまで駅弁をたくさん食べてきました（朝、昼、晩、全部駅弁なんて日も…）が、これほど印象に残った駅弁はありません。



これが幻の駅弁「うに弁当」。包みは至ってシンプルです。



「うに弁当」の中身。遠くまで食べに来て良かったと思わせるだけの価値があります。



列車から眺める三陸の海。高台の上を走る列車からの眺めは抜群です。

今回ご紹介したウニ弁当を筆者が食したのは震災前のことですが、現在でも久慈駅では「うに駅弁」を売っているそうです。食べたら皆さんも感動のあまり「じぇじぇじぇ！」となること間違いありません。

(岡山大学職員組合 組合だより 167号より再掲)

おわりに

今回は、東北地方の旅行記を2編ご紹介しました。実は2014年に、この記事の最初の掲載先である岡山大学の組合だよりで、春、夏、秋の3回に分けてそれぞれの季節にふさわしい観光地を紹介しています。春は平泉、夏は松島、秋は今回ご紹介した記事の中の一つ、山寺です。冒頭でも述べたとおり、東北はまだ復興の途上です。観光で他の地方から多くの旅行者が訪れ、地域の経済に貢献して、少しでも早く完全復興してほしい、そのお役に立てば考え、このような企画記事を考えてみました。一方、三陸鉄道の記事は、2013年の9月に組合だよりに掲載されたものですが、これは、掲載当時「あまちゃん」の放送が終盤に入っており、世間の注目を集めていたため、急ぎょ企画しました。紹介する路線を選ぶときの思いの一端が伝われば幸いです。